

---

# とある女神の上条当麻外伝ー学園都市での一週間ー

魔界魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある女神の上条当麻外伝―学園都市での一週間―

### 【Nコード】

N8024X

### 【作者名】

魔界魔

### 【あらすじ】

とある女神の上条当麻―後日談ストーリーの外伝です。たった一週間の学園都市での休息期間を貰った守護女神の上条当麻はどんな風に過ごすのか？見たい人だけ見てください。当然ながら作者はかなりの駄文です。

## まずはじめ

魔界魔「いきなりですが作者の魔界魔です。」

当麻「本当にいきなりだな」

魔界魔「いきなりかどうかどうでもいいことはおいておいて、本題に入りたいと思います」

当麻「本題？」

魔界魔「はい、その本題とは、単刀直入にいうと……」

当麻「…？」

魔界魔「当麻には学園都市に一週間戻ってもらいます。」

当麻「はい！？」

魔界魔「変な驚き方をするな、とにかく当麻には一週間学園都市にいつてもらってから」

当麻「いやいやいや！いきなりでわからないから！！そもそもなんで一週間なんだ！」

魔界魔「関係あるか！一週間戻らせてもらうだけありがとく思え！！」

当麻「そもそも学園都市で一週間何をしろってんだよ！」

魔界魔「いや、別に最近平和じゃない当麻に休日を与えてやるだけだ」

当麻「……何かたくらんでないか」

魔界魔「うるさい！そんな事どうでもいいだろ！とにかく言って来い！次元移動！  
テレポーション

当麻「おい！ちょっと……待て！！」

当麻は消えましたb y魔界魔

魔界魔「そうゆう訳で外伝をお送りします。よろしくお願いします。」

」

## 1章：戦いの予兆（前書き）

・この小説は少し原作に近づけようと読みにくく書きました。読みにくい人は本当に申し訳ございません。

## 1章：戦いの予兆

<学園都市>

ここは東京西部を開拓し作られた文字通り学生の町である。超能力の開発が行われておりこの学園都市では無能力者と超能力者に分かれているのである。そしてこの学園都市の男は少し前に突然姿を消したのであった………

~~~~~幻想殺しの帰還~~~~~

1

「ぎゃあああああああああ！！！」

・・・話を戻すが現在当麻は空中にいる。なぜかって？それは俺の仕業さby魔界魔

「作者！後で覚えてる絶対に倒す！！」

魔界魔の仕業で空中に落とされた当麻、当然ながらこのままだと死んでしまう、それも肉一つ残さずにグチャグチャのミンチになりそうだ。

「やばい！！学園都市に運良く着地したとしても無事でいられる訳が無い！前回みたいに五和が運よく助けてくれる訳ではないし」

前回は五和に助けてくれたおかげで無事ではあったが、今回はおそらくあのような奇跡は絶対に起きない

「……………そうか！！俺にはこの腕輪があった！！」

当麻が腕に装着していた女神の腕輪を見る。これを使い女神化すれば空中を飛べる。やりたくはないが生きる為にはやるしかない。が・  
・・・・ここで不幸が起きた。

「あつ・・・・・」

うつかり女神の腕輪を間違つて外してしまった当麻。肝心な時に当麻の不幸は起きた。腕輪は腕から離れ空中に揺られるように落ちていく。

「なんでこんな時に不幸がおきるんですかー！！これも神様のいたずらかー！！いたずらじゃすまないぞこれー！！」

とりあえず当麻は腕輪を取ろうと腕輪に近づくかめちゃくちやの動きをする腕輪を取れない当麻

「このままだとマジでヤバイー！！学園都市に帰る前に俺の命がもたないー！！」

当麻は必死で女神を掴みにかかる。そして・・・・・

ガシッ！！

「ふう~~~~危なかった・・・」

なんとか女神の腕輪をキャッチし腕にはめ直す。そして今度こそ・

・  
「プロセスサユニット装着ー！！」

すると当麻の体が光に包まれ、変身する。

「危機一髪ね・・・・・」

イマジンハート強引に落ちる軌道を変えてなんとか飛行に成功する。

「とりあえず学園都市に降りないと・・・・・」

すると今度はゆっくりと学園都市に向けて下降を開始する。しかし当麻は知らなかった・・・この後もつとも大きな災難が降りかかる事を・・・・・

ここは学園都市の大きな無人ビル、窓ガラスは割れ、まるで武装集<sup>スキルア</sup>団の溜まり場みたいな場所に二人の男女がいた。

「ここが学園都市か？」

一人の男が忌々しいそうにビルから町を見下ろして言い放つ、する  
とすぐ隣にいた若い女性の声が響く

「そう……科学がすべての私達、魔術師達の最大の天敵」

本来、魔術師はここにはいない、同盟を結んでいるイギリス  
正教の人間は一部除くが

「この町にはあの幻想殺しがいると聞いたが……」

男が幻想殺しという言葉を口にする。

「ええ……異世界に飛ばされたって聞いたけど、油断はできない  
わね。」

「それはなぜだ？異世界に飛ばされたのならもうこっちは戻って  
くれないだろう？」

すると女性は呆れたように溜め息を吐き出す

「過信しすぎるのは駄目よ、あの幻想殺しが進化して戻ってきたと  
私は聞いたから……」

すると一瞬表情を変えた男だったがまた仏教面に戻り静かに言い放つ  
「進化……？どうゆう事だ？」

「それはなにかはわからないわ……だけどあの幻想殺しは油断す  
るなってことよ」

魔術師達にとって幻想殺しは油断できない異端視でもあった。最初  
はあの禁書目録を管理してるだけどあまり見られてないが、第三次  
世界大戦において当麻は完全に魔術師から脅威と思われていた。

「もし幻想殺しが敵対するとしたら……」

「まちがいに一番の障害になるわね……私達の目的を果たすた  
めの……」

なぜか女性は少し悲しそうな顔をする。すると男性は懐から一枚の



紙切れを出し女性に私

「通信術式だ、何かあったら呼べ」

すると男性は忽然と姿を消してしまった。男性が消えたのを確認すると女性は静かに呟いた

「アレイスタークロウリー・・・あなたはこの事態にどう動くのかしら・・・」

女性はこの言葉を最後に姿を消してしまった。

3

ここは窓の無いビル、ここに統括理事長の幹部であるアレイスタークロウリーの本部である。そしてこの窓の無いビルの内部・・・金髪の男と子供にも大人にも女性にも男性にも見える男と会談していた。

「おい！どうなっている！魔術師の侵入を簡単に許すとは・・・」

金髪の男が荒々しそうに目の前のポットに入った人物・・・もとアレイスタークロウリーに言い放つ、しかしアレイスターは表情を変えず言い放った

「二人の魔術師くらい侵入を許したくらいで慌てるくらいの事じゃないよ土御門元春」

「フン・・・ふざけ、アレイスタークロウリー」

すると土御門は携帯の写真をアレイスターに見せる

「この男性の魔術師はジモン・ガラム、そして女性の方はメイ・クラネ・・・二人は呪術魔術師という日本の魔術師だ、もし学園都市側でこの二人を撃退すれば、また戦争が起きるぞ、アレイスター・・・貴様は一体なにが目的だ！」

土御門は怒りの声を上げる、しかしアレイスタはそれでも表情を変え事はない

「君は知る必要は無いし教えるつもりも無いよ土御門元春・・・そ

れにこの件は君が手を出す必要は無い」

「・・・この件はステイルや神裂だけでは手を終えない強さを持っている。あの二人に任せるってんならお前は無能だアレイスター」

するとアレイスターは笑いという表情に顔を歪ませた

「・・・ついさつき上条当麻が帰還した。」

するとアレイスターの言葉に驚きの言葉を上げる土御門

「なっ・・・上条当麻が！一体どうやって・・・」

「それはこの作者に聞くといい」

アレイスターが言っている事が理解できなかった土御門、しかし土御門はまた冷静になつて

「上条当麻でも今回の件をかたずけるのは厳しい、それでも上条当麻を巻き込むのかお前は」

するとアレイスターは最後にこい言い放った、そしてその言葉を聞いた土御門は大きく驚いた。

「上条当麻は異世界で未知数の力を手に入れた、私達が驚く程のな・・・」

その言葉を聴いた土御門は何も言わずに姿を消した。

4

「着地成功!!」

なんとか自分の寮に着地したイマジンハート、当然ながらこんな姿を人前で無闇にみられたくないのですぐに変身を解く。

「・・・とりあえず部屋に入るか・・・久しぶりだな・・・自分の部屋に戻るの・・・あっ！」

するとここで当麻はある事を思い出す。そう、当麻の同居人である

インデックスの存在である。おそらく長いこと家が空けていたのだからまず噛み付かれるのは目に見えていた

「・・・覚悟を決めるか」

そして当麻は扉を開ける、そして少し歩くと散らかった部屋なのは直ぐ分かった、そしてテーブルの上に置いてあったのはすべての元凶である。黒い水晶

「あれ・・・？なんでこの水晶割れてるんだ？」

黒い水晶は修復不可能なくらいバラバラに割れていた、しかし当麻はふと疑問に思ったなゼインデックスがいないのか？

「一体インデックスはどこに・・・？また子萌先生の所か？」

やれやれとめんどくさがりながら立ち上がる当麻はとりあえず子萌先生に電話する事に

ブルルルルルルルルルル・・・カチャ

「はい、もしもしですよー誰ですかこんな夜中にー」

妙に甘ったるい声が響いてきた、どうやら寝ぼけているようだかそんなの気にせず話をする。

「あ、すいません、子萌先生」

すると携帯越しからいきなり大きな声が響き、当麻の耳を攻撃する。

「か・・・上条ちゃん！上条ちゃんなんですか！！」

「はい、そうですけど・・・」

「一体この数日間どこにいつてたんですか？いきなり姿を長い間消したから先生は心配で心配で・・・」

「すいません子萌先生、これには事情がありまして・・・」

「上条ちゃんがこんなに長い間姿を消す事情ってなんですか！話してください！」

どうしよう・・・つと当麻は思った異世界にいったなんて話しても信じてくれる訳がないだろう。しかしこのまま逃げ切るのは無理そうなので一かばちかに掛けてみる事にした

「・・・信じてくれないと思うんですけど・・・話しますか・・・」  
「？」

説明中・・・・・・・・・・・・・・・・（めんどくさいわけではありません  
んby魔界魔）

「信じられない話ですけど・・・今の当麻ちゃんならありえますね・・・」

「・・・子萌先生、それで本題にはいたいんですけど・・・」

「あつ・・・はい、それで上条ちゃん、こんな夜中になんの用ですか？」

「（夜中・・・？）」

当麻は時計を見てみると、現在時刻は01:27分とすでに夜中だった、当麻はまだ8時くらいかと思っていたが大きく違ったらしい  
「えつと・・・インデックスがそちにきてませんか？」

当麻が聞くと子萌先生はこう答えた。

「上条ちゃんがいなくなってから私の家で寝泊りしてますけど・・・今日はもう遅いので明日早くシスターちゃんに顔を見せてあげてください。」

すると当麻は安心したように返答した。

「はい。ありがとうございます。子萌先生」

「上条ちゃんも早く寝るですよ」

するとその言葉を最後にプチッと電話が切れた音がした。当麻の携帯は充電が無くなったようだ。すると安心したのか当麻は腕を上に大きく伸ばして

「さって・・・久しぶりに自分の部屋でゆっくり寝るとしますか・・・」

すると当麻はなぜか自分の部屋の電気をつける

「・・・寝る前にこの残骸を片付けないと・・・ハア・・・やつぱり俺って不幸だ・・・」

当麻は今日一番の大きな溜め息を吐いて眠りについたらしい。しかし本当の戦いは明日から始まるのを当麻は知る良しも無かった。

## 1章：戦いの予兆（後書き）

・次回からは戦いが始まります。当麻のタイムリミットはのこり一週間、どうする？当麻！？

## 2章：動き出す進入者（前書き）

・今回はとある聖人と最強の能力者がでてきます。後、本編の方もよろしく願います。

## 2章：動き出す進入者

~~~~~再開と戦いの始まり~~~~~

1

現在時刻 7：00

「はあ~~~~良く寝た……」

上条当麻が起床する。睡眠時間はそれ程取っていないが、ゲーム業界にいて仕事に追われトラブルに巻き込まれて疲れ果ててはの繰り返しを向こうで送ってきた当麻だったが、今は久し振りの平穩を味わっている気持ちが強かった。

「……仕事に追われていた向こうと比べると良く眠れたな、さてとつとと朝御飯を済ませて覚悟を決めないと……」

当麻のいう覚悟というのはおそらく噛みつかれる覚悟である。おそらく1ヶ月程か家を空けていた為インデックスに何を言われても文句は言えない当麻であった。

「……とりあえずこの服を着替えるか」

現在、当麻が着ていた服は学生服で冬服バージョンとこの学園都市では決してめずらしくは無い服装だが、それでも休みの日は私服の方が何かといいのである。

「……時間制限は後1週間か……これもどうやって説明するか……」

当麻は後1週間の猶予しか残されていない、1週間経つとまたゲーム業界に戻らなくてはいけない、それでも何も説明しないで姿を消すなんて真似は当麻には決してできなかった。学園都市にもインデックスやあのビリビリだっている。けど向こうにもネプギア達がい



る。だが当麻はゲーム業界の方を選んだ。そう説明」しなくてはならない。

「考えるのは後回し、それよりも朝御飯を…」

時間制限に関しては頭から追い出し、冷蔵庫を確認する上条当麻、しかし部屋に響いたのは不幸男の叫び声だけだった。

2

「わーい！つてミサカはミサカは外食できる喜びを表現してみたり！」

「うるせエぞ、黙ってメニュー選ベクソガキ」

突如ファミレスに響く男女の声、最初に声を出したのはミサカ20001号もとい「最終信号<sup>ラストオーダー</sup>である。そしてその声を抑え汲むかのように鬱陶しそうに頭を描きながら言葉<sup>アクセラレータ</sup>を吐き捨てる少年もとい学園都市最強の能力者にして頭脳「一方通行」である。

「いいじゃん、いいじゃんって久し振りの外食に嬉しいがるのは当然の事じゃんってミサカはミサカは言ってみたり」

最終信号は椅子に座りながら地面に届かない足をブンブン嬉しそうに振りながら喜ぶがまた白髪の少年はめんどくさそうに答えを返答する。

「朝っぱらからうるせエンだよクソガキ、頭にガンガン響くからやめろ」

すると最終信号はいじわるそうな笑いをする。

「それってどこの二日酔いさんなのってミサカはミサカはいじわるそうに返答してみたり」

「……言ってるクソガキ」

すると一方通行はふと大きな窓を見た、特に意味は無い、そんな理由だったが彼の目にある人物が目に入った。するゝ一方通行の指が小刻みに震えだす、木原数多との戦いの時から起きるようになった

魔術師への感知方法である。

「（まさか…あいつはまたあの変な術を使う奴等かア…）」  
しかしその人物には関わりも無い為、とりあえずスルーしておく事にする。

「どうしたのってミサカはミサカは聞いてみたり」

最終信号の方を向く一方通行アクセラレーター

「別に…なんでもねエよ…」

アクセラレーター  
一方通行はめんどくさそうに返答した。

3

ここは子萌先生の家、古びた家のようにで以前、来たときはビールの空き缶などが回りに散乱していたりしたが未成年？のインデックスがいるのでおそらくそんな事は無いだろうと当麻は思っ、覚悟を決めた当麻は子萌先生の扉をノックする。

「はいはい…新聞ならお断りですよ」

子萌先生が扉越しからそう言うてくる、めんどうさいから勝手に上がろうかとかいう失礼な事を当麻は考えたが、そこは生徒なのか今度は口頭で伝える事にする。

「子萌先生、俺です上条当麻です。」

すると古びた扉が開くと、出ていたのは当麻の担任の子萌先生である。一目みてはまず子供に見えるが立派な成人である。

「か…上条ちゃん、本当に帰ってきたんですね！シスターちゃんが話したい事があるそうで…」

「インデックスか？」

当麻はインデックスから話したい事があるというのは珍しい事だった。もしかしたら噛みつかれるかも…と当麻は悪感を感じたかとりあえず中に入る事にする。

「シスターちゃん、上条ちゃんが帰ってきましたよ」

子萌先生がそういいながらリビングと思われる部屋がある。さすがに未成年がいるのかたばこや酒などの缶や瓶は一切無かった、するとそこにいたのは白い修道服を身に纏った少女インデックスである。

「子萌はあっちいつて、とうまと二人だけで話したいから」

「…そうですね、それでは先生はおじゃまみたいなんで失礼しますよ」

「えっ……ちょっと待って子萌先生！ちょっと！カムバック！」

しかし当麻のそんな叫びも虚しく子萌先生は家を出てしまった、しかも鍵までしめて…

「とうま」

「はい……！」

いきなり声をかけられ肩をブルンと震わせる当麻、しかしインデックスからはあの黒いオーラ見たいなのはまったく見えなかった

「子萌から事情は全部聞いたよ、だからとうまには知ってもらいたい事があるんだよ、当然噛みつきはその後で…」

噛みつき、という言葉に脳内が恐怖で支配される当麻、だがそんなのおかまいなくインデックスは話を続ける

「まず聞きたい事は色々あるんだけど…まず話したい事は女神についてなんだよ」

「女神？」

インデックスはどうやら女神について解説するらしい、インデックスが説明するということはなにか知られてはいけないことがあるのか…と思う上条当麻であった。

「女神というのはそのままの意味なら女性の姿をした神という意味になるね、けど女神は世界に20人しかいない聖人を軽く超えた存在なんだよ」

「聖人といえど…神裂か？」

イギリス聖教の必要悪の教会のメンバーであり聖人でもある神裂火織、彼女は聖人でかなりの戦闘能力と身体能力を持っている、その神裂がどれ程の実力を持っているのかは上条も良く知っていた

「とりあえず当麻は女神化して」

「……はい？」

いきなりすぎる事を言われた上条は面食らう。

「当麻が本当に女神化できるのか見てみたいから」

すると上条は必死で反論する。そこまで女神化が嫌なのか…

「…やらないと噛みつき時間延長するよ」

「………わかったよ…やればいいんだろやれば…!!」

すると当麻が右腕を上にはばさず、そして起動ワードを…

「プロセツサユニツ……」

ドカーン!!!!!!!!!!

「「!?!」」

いきなりの出来事に女神化を妨害された当麻、それもその筈突然玄関が大爆発を起こした、びっくりしない訳が無い、すると煙から仏教面の男性が出て来た

「…フン、ここにいたか禁書目録…」

「!?!」

当麻は驚く、インデックスを知ってるという事はおそらく魔術側の人間である筈、そう直感したのだ

「デメエ…何物だ!!」

すると仏教面の男は表情一つ変えずに言い放つ

「まずは自分の名を先に名乗るのが常識では無いか? 幻想殺しの上条当麻」

すると当麻が眉を潜めて、より一層警戒心を強くする

「とうま……こいつはやばい…逃げよう!」

インデックスはそういうがどう見ても逃がしてくれる状況では無い  
「残念だが禁書目録、我はお前を逃がすつもりは無い」

「…なんでインデックスを狙うんだ」

当麻が聞くが相手は短く一言

「貴様が知る必要は無い」

すると目の前の男は戦闘準備に入る

「冥土の土産に教えてやろう、我が名はジモン・ガラム、日本の魔術師だ」

すると一瞬、何が起きたのかわからなかった。当麻の体を地面に激突し強烈な激痛が襲った

「フン…この程度か…」

ジモンはそう吐き捨てて今度は激痛で動けない当麻に日本刀を向ける。

「とうま…!」

インデックスが叫ぶが、当麻には避ける余裕も無かった。このままではゲームに戻る前に死んでしまう。

「（よけられねえ…!）」

無慈悲にも日本刀が上条当麻に振り落とされた。

4

カキン!!

刀と刀がぶつかり合う音がした。

「（・・・一つ体何が?）」

上条当麻が目を開けるとそこにいた人物は上条も良く知る人物だった。上条は理解するのに時間がかかったがすぐに理解した。Ｔシャツと太腿の際どい所までカットしたジーンズを身に纏う人物、

「無事ですか！上条当麻！」

「か……………神裂、どうしてここに？」

そこにいた人物は世界に二十人しかいないとされる聖人、神裂火織

である。

「……実は統括理事会の命令でこの町に侵入した魔術師二人を追っていたのですが、どうやらその魔術師の狙いはインデックスのようです。」

すると上条当麻が驚いた顔をする。

「……という事はこいつはインデックスを使ってまた学園都市をどうこうするつもりなのか？」

上条の問いに神裂が返答しようとする、ジモンが口を開いた

「敵を前にして話している暇があるのか？それに聖人とは言え一人増えたぐらいで……」

すると神裂が少し口元を緩める。すると今度は大勢の人が武器を持つて入ってきた

「一人だけだと思ったら大間違いなのよな」

今度、口を開いたのはさつき入ってきた天草式の教皇代理である建宮 斎字であった。

「建宮！それに天草式のみんなまで……」

すると二重まぶたが印象的なショートヘアの少女の少女、五和がやってくる。

「当麻さん、大丈夫ですか」

「あ……ああ、後なんでおじぼり？」

「……やっぱりというべきかおしぼりを渡す五和、だがジモンは一枚の紙を取り出す。

「……これだけの人数を相手にするのはキツイのかもしれない、ならこちらは最も善良な戦いをさせてもらう」

するとジモンが紙を半分に2回売たたむとその紙に黒い文字の様な物が浮かびあがる。

「飛行せよ！！鳥神紙」

するとジモンが空中に浮遊し神裂達を十分、見下ろせる場所に立つ。

「貴様らは武器での戦いを中心とした部隊、空では戦えまい。」

すると建宮がフランベルジュを悔しそうに地面に叩きつける。

「くそっ！空にいられてもこっちは手だしできんのよ！！」

神裂ならジャンプすれば届くかもしれないが、飛んでいる方が有利に決まっている

「おそらくあの紙で日本の神の力を借り、力を行使しているはず・

・

神裂も手を出せない状況になっていた。しかしこの中に一人だけいる空中で戦える人物が

「俺が行く」

その場にいた全員が上条当麻の方に視線を集めた、するとジモンは興味深そうに話かける。

「ほう・・・幻想殺し、お前はどうか動くか・・・」

だがこの場にいる全員は当麻を止めようとする。

「無茶です！いくらあなたでもあの相手には・・・」

神裂はそういうが、何故か上条の顔には笑みがあつた、そう何か切り札を残しているかのように

「大丈夫だ神裂、そしてインデックス・・・待つてろ・・・」

インデックスはもとめようとしていたが、今の言葉で止める気を完全に無くしてしまったらしい。

「うん・・・がんばって、とうま」

「ああ、絶対に勝つからなインデックス」

そういうと当麻はジモンの真下に向かう、するとジモンが今度は刀身が金色の刀を取り出す

ライキリ

「この刀は「雷切」といってな雷神様の力が宿る刀だ、この刀一本で力を最大限まで引き出す事ができれば学園都市を破壊する事くらい訳の無い事だ、ただこの刀の力を引き出す為にはこの刀で人殺し必要がある。のろわれた刀でね・・・」

ライキリ

妖刀と呼ぶにふさわしい雷切の説明をすると上条は怒りを剥き出しにする。

「テメエ・・・まさかその刀で・・・」

すると常時仏教面だったジモンが始めて笑いに顔を歪ませる

「ああ・・・そうさ・・・この刀で我は人を斬ってきた、この町の物をざつと80人くらい・・・もういい」・・・何？」

突然、説明がさえぎられたジモン、目の前には今にもなぐりかかりそうな上条がいた。

「・・・俺は今何をすればいいかテメエのお陰で理解できたよ」

すると上条が腕を振り上げる。

「プロセツサユニット装着!!」

すると上条の体が光の柱に飲まれる、そして光が晴れるとそこにいたのは・・・

「・・・貴様・・・何者だ!」

突如、現れた人物に警戒心を露にするジモン、そして上条の女神姿にどれもが驚いていた。そしてイマジンハートはブレイブソードをジモンに向けて言い放つ

「まずはそのふざけた幻想は私がぶち殺す!!」

この時のイマジンハートの目は真っ直ぐな瞳をしていた。



## 2章：動き出す進入者（後書き）

・次回は遂にイマジンハートとジモンの戦いです。ヒーローハードと外道魔術師、どちらがかつのか？

### 3章：人間の身にして神の力を宿す物（前書き）

・ついにイマジンハート対ジモンの戦いが始まります。ちょっと読みにくいかもしれませんがよろしくお願いします。

### 3章：人間の身にして神の力を宿す物

~~~~~ 激突！幻想殺し対魔術師！~~~~~

1

「始まったわね．．．．．」

女性がビルの上で呟いた、周りから見れば何いつてんだこいつとかぐらいにしか思わないが女性はビルからどこか遠くを見てるようだった。

「．．．ジモンが負けるとは思わないけど、もし負けたら．．．私が出るしかないわね。」

女性は白いワンピースを身に纏っていた。この現在の季節にしてはかなり肌寒い格好だった。しかし女性は寒そうな素振りをまったく見せない、いやそれとも普通に寒くないのか、すると女性はどこから一枚の紙を取り出した。

「．．．．．こちらメール・クラネ、そっちの様子はどうか？」

「．．．．．」

するとメール・クラネは溜め息をつく。

「返答無し．．．か」

するとメールは紙から手を離す、今日は風が強い、たった一枚の紙切れどこかに飛んでいつてしまった。

そしてメールは大きなスーツケースを持ってくる。そしてそのスーツケースの中を取り出す。中に入っていたのは大きな鎚と手袋であった。

「．．．まさかこんな大それた物が日本に眠ってたなんてね．．．」

メールが手袋を取り出しそれをはめる、そして大きな鎚を取り出す。

「．．．神鎚ミヨルニルに鉄星手袋」  
ヤールングレイブル

メールはそう呟くと、今度はメールとは逆方向から声がした。

「神鎚ミユルニル・・・良くそんな危ない物を学園都士に持ち込めた物だ・・・」

メイルは声がした方を振り向くとそこには顔にバーコードと大量の耳ピアスを付けた不良神父ステイル「マグナスの姿であった。」

「・・・アレイスタはなぜ私の居場所が分かったのかしら？」

するとステイルはたばこを投げ捨ててからいった。

「この学園都士は監視の目がかなり広くてね・・・人間一人見つかるくらいは結構簡単なんだよ、魔術で姿を消した連中とかはちよつと手こずるけどね」

するとメイルは小さく笑ってステイルにいい放つ

「それで・・・私とジモンを止めにくたわけ？」

するとステイルは懷からルーンカードを取り出す。

「残念だけどそうさせてむらうよ、こつちだつて仕事だからね」

するとメイルが神鎚ミユルニルを構えてステイルにいい放つ

「・・・少し話をしてあげましょうか」

「・・・」

ステイルは警戒する。いきなりざつくりやられるかもしれない、そう思った。するとメイルが口を開く

「今ね・・・ジモンが戦闘しているのよ。」

するとステイルがそれがどうしたとでもいいいたそうにする。しかしメイルは話を続ける

「幻想殺しが帰還した話は知っている？」

メイルは面白そうに言い放つ、その言葉にステイル「マグナスは眉を潜める

「・・・アレイスタからは聞いていたけどね・・・信じてはいない、もし帰ってきたとしてもこの戦いには邪魔になるだけだと思うけどね、僕は」

「じゃあ・・・もしその幻想殺しが・・・」

「？」

するとメイルは冷たく言い放つ、さっきまでしてた表情を一気に固

くして。

「人間が神の力を振るう事ができるとしたら・・・あなたは思うう？」

この時ステイル「マグナスは彼女のいつている事が・・・わからなかった。」

2

「切り裂け！雷切！」

ジモンが今はまだ地面にいるイマジンハートに突進してくる。そしてジモンは持っていた雷切ライキリを思いっきり真横に振る、しかしイマジンハートもそれを空中に飛び回避する。

「ほう・・・多少できるようになったか・・・だが」

するとジモンが雷切ライキリとは別にもう一方の日本刀を取り出す白い刀身と見た目は普通の日本刀だがジモンは一気にイマジンハートに近づきその刀を振るう

「雲斬！」

振るわれた刀はイマジンハートのレオタード状の衣装に少しかすりやぶれた程度で傷は無かった。それでもプロセッサユニットをこんなに簡単に切るといふ事はかなりの切れ味があるという事だ。

「教えてやろう、この刀は膝丸といってな・・・とてつもない切れ味を誇ってな・・・扱いがかなり危険でな・・・」

しかしイマジンハートもやられてばかりでは無い、ブレイブソードを構えジモンに向かっていく。

「獅子九連斬！」

イマジンハートは連続攻撃を仕掛ける。ジモンはすべてをたたき返すかのように受けるが、現在ではスピードや力などはイマジンハート

トの方が上であつた。連続攻撃を強制的に中断させジモンの後ろに回りこむ

「なっ・・・早い！」

そして振り向いたジモンの顔面に思いっきり右ストレートを叩き込んだ、ジモンは数メートル飛ばされるがすぐに空中で強引に態勢を取り戻した、そして顔を抑える

「き、さま・・・」

ジモンが膝丸を構えなおし、イマジンハートに向かって行く

「死ぬがいい！下等な猿が！」

ジモンが膝丸を縦に思いっきり振るう、だがイマジンハートはこの一撃を回避し、ジモンの膝丸を持っていた方の手首を掴む

「なっ！」

ジモンは振りほどこうとするが、イマジンハートの力は女の力とは思えない程強かった、するとイマジンハートは右の拳を構える、狙いはジモンの体中心である。

「今まで奪ってきた命をなんとも思わない相手には・・・容赦はない！」

グシャー！！

イマジンハートの右ストレートをもう一度腹に喰らい今度は空中から地面に叩きつけられる、ジモンが叩きつけられた所を中心に回りのコンクリートが思いっきりひび割れる、だがジモンは立ち上がる、そして空中にいる相手に殺意を向ける

「よくもやってくれた・・・な、この下等な猿がアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

するとジモンは一枚の紙を取り出す、大きさは速記読典ショートハンド一枚と同じ大きさだろうか、その紙を太陽の真下になるように掲げる

「出てこい！我が最強の霊装！トリシューラ！！」

すると紙一枚から三つの先端がある槍が現れジモンがその槍を手

取る、いきなりどんな攻撃が来るかわからない、イマジンハートは警戒する。

「あれは・・・トリシューラ・・・」

遠くで見ていたインデックスが呟いた

「何なのよ？そのトリシューラつつうもんは？」

建宮が聞く、インデックスは説明する。

「破壊をつかさどる神シヴァが持つとされる槍でその槍の三つの先端は力、行動、欲望を表すんだよ、そしてトリシューラは魔力を使つて持ち主が敵と定めた物を例外無く裁きを下す霊装なんだよ・・・」

「簡単に言えば、武器になった天罰術式である。だがトリシューラは伝説の武器、それだけで済む筈がない。」

「ちっ・・・それって厄介な武器つて事なのよな・・・」

「それでも・・・あの上条当麻には天罰は効かない筈では・・・」

「それ以外のトリシューラを持つ物は破壊神シヴァの力を一時的に身に宿す事ができ、身体能力を格段に上昇させ、空すらも飛べるんだよ」

すると建宮は悔やむ

「・・・結局今回もあの少年一人にやつてもらうしかないよな・・・」

「大丈夫だよ・・・とうまは負けない」

インデックスの言葉を天草式は信じることにし戦いを見守った

3

「始めましょうか・・・こちらも・・・」

メイルがミルニルを構えて言い放つ、そしてステイルも構える

「先手は上げますわ、どうぞルーンの魔術師さん」

「それじゃ遠慮無く、いかせてもらうよ・・・」

ステイル呪文の詠唱を始める

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（MTWOTFFTOIIGOIIOF）

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり（IBOLAIIOE）

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（IIMHAIIBOD）

その名は炎、その役は剣（IINFIMS）

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ICRMMBGP）魔女狩りの王！」

すると回りにルーンのカードがばらまかれステイル「マグナスの切り札、魔女狩りの王が姿を現す。教皇級の魔術とも呼べるこの術はステイルの一番の切り札であった。

「へえ・・・それがあなたの切り札なのね・・・でもその切り札はルーンが無いと使えないみたいだけど・・・」

「・・・だが僕の魔女狩りの王はルーンがある限り何度でも蘇るけどね・・・行け、魔女狩りの王！」

魔女狩りの王が3000 を誇る大きな手でメイルを押しつぶそうとする。

「こんなの喰らったら骨残りそうにないわね・・・でも」

メイルがミユルニルを空に掲げると、いきなり空から雷が降り注いだ「なんだこれは・・・雷か！？」

ステイルは驚く、メイルは余裕な表情を崩さない

「驚くのは・・・これからよ」

雷が晴れると同時に魔女狩りの王はどろどろになって崩れ落ちた、しかも再生をする様子は無い

「なっ・・・魔女狩りの王！どうして再生しない・・・まさか！」

ステイルが何か気づいた様で周りを見渡す、するとメイルが今度は意地悪な笑いを浮かべて言い放つ

「気づいちゃった？最初の雷はね・・・ルーンカードだけを狙って



放った物なんだよ・・・」

「くっ・・・」

ステイルは切り札を失った為、この戦いではかなり不利になった、くわえた相手はまだ何を隠しもっているかわからない

「残念だけどあなたに勝ち目は無い・・・退くなら今の内だけど」

「・・・残念だけど、逃げる訳にはいかないんだよ・・・君があの禁書目録を狙うならね・・・」

するとメールがステイルに歩み寄りミルニルをステイルに向ける

「そう、なら死になさい」

そして生物を一撃で死に至らしめる鎚がステイルに振り下ろされる。

4

「始めようか幻想殺し、死ぬ覚悟はできているのであるう」

ジモンがトリシューラをイマジンハートに向ける、だがイマジンハートは元から死ぬつもりも負けるつもりも無い

「残念だけど・・・死ぬつもりなんてサラサラないけど・・・インデックスにお別れをいうまではね」

するとジモンが飛翔しトリシューラを持ってイマジンハートに近づく

「そうか・・・なら死ぬでは無く殺すで行くか」

イマジンハートに近づいたジモンはトリシューラの三つの先端をイマジンハートに向ける

「破滅と破壊の裁きをこの愚か者に落とせ（destructio n fool decision）！」

するとトリシューラの先端から巨大な氷塊が現れる、そして氷塊はイマジンハートに放たれる、だが・・・

ズバッ！！

放たれた氷塊はブレイブソードで真ツ二つに切り裂かれた、切り裂かれ二つに分かれた氷塊は空中で消滅した

「・・・消されるとは思っていたが、まさか切り裂かれるとは予想外だったぞ・・・」

ジモンは驚くが直に冷静を取り戻す。

「遊びはここまでだ下等な猿よ・・・我がトリシューラの前に沈むがいい！」

するとジモンが呪文の詠唱を始める。その隙を突いてイマジンハートはジモンに突っ込む、だがジモンはイマジンハートが近づいてきたのを確認すると不気味な笑いをする。

「掛かったな！行動を抑制する鎖よ（action restraint chain）！」

「えっ・・・」

するとイマジンハートが立ち止まる、すると黄色の魔方陣が現れ黄色の鎖がイマジンハートに向けて放たれる

（まさか・・・最初から私を誘い出して動きを止めるのが狙いだったって事！？）

イマジンハートは冷静に分析するが、そんな暇は無い、イマジンハートは素早く反応して鎖を避けるが、鎖は自動的にイマジンハートに方向を変える、ついでにイマジンハートに放たれた鎖は全部で6つ「残念だがそれは追尾性能持ちだね・・・貴様がどこまで逃げ切るか見ものだな」

「くっ・・・」

イマジンハートは鎖から逃げ続ける、ただこのままではやばい、いくら逃げ回ってもこのもじゃこっちのスタミナがきれて捕まる、しかし打開策はまだ見つからない、正直いってやばい

「フン・・・だが我の狙いは貴様だけでは無い・・・」

イマジンハートが聞くと、一本だけ鎖が別の人物を追っている、その人物は・・・

「インデックス！」

「フッフッフツ……そうさ……私の狙いは禁書目録」

「まさかあなた……最初から!!」

「そうさ……私の狙いは元から禁書目録だ貴様も狙いではあるが……」

しかし鎖はインデックスに向かっていく、神裂や天草式が構えるが、この鎖は破壊できない為、正直いつて鎖を止める事は天使でも不可能なのだ、するとイマジンハートが真っ直ぐインデックスに向かっていく

インデックスを守る為に

「インデックス!!」

「とうま!!」

イマジンハートは鎖を追い抜きインデックスの前に立つ、イマジンハートはブレイブソードを構える

「破壊できなくても……軌道をさらす事ならできる!」

イマジンハートはブレイブソードを何かを弾きかえすかのように横に振り鎖の軌道をそらした。だが今度は弾き返された一本ともう一本で来る

「上条当麻!」

「神裂!!」

二人で刀を振るい鎖の軌道を逸らす、しかしいくら逸らそうと何度何度も鎖は来る、だが今度は天草式のみんなも鎖を力を合わせて弾き返す、今度は建宮がイマジンハートの前に立つ

「少年ばかりいい格好させてらんないよのな……だよなみんな!」

おおー!!と天草式の士気が上がった、このままならなんとかなるかもしれない、しかし希望は簡単に崩れ去った

ありえない出来事が起きた、黄色の鎖3本が何と地面から飛び出してきた、さすがにこの事態には対処できなかった、そして鎖はインデックスに向かっていく……だが……

「危ない!」

インデックスを押し倒したイマジンハート、おかげでインデックス

には鎖は当たらなかったが、イマジンハートは鎖とっしょに地面に叩きつけられた

「フン・・・これまでか・・・」

遠くで見ていたジモンはそう吐き捨てた、そしてイマジンハートに近づいていく。

「とうまー!」

インデックスはイマジンハートにそう叫ぶが返事は無い、すると煙の中からイマジンハートが出てきた、しかしイマジンハートの体には鎖が巻きついていて、そう幻想殺しが当たらないように右手が当たらない角度で巻きついていて身動きがとれない

「どうだ・・・これが貴様の弱さだ他人に構うからこんな事になるのだよ下等の猿が・・・」

ジモンが接近し鎖で縛られているイマジンハートに言い放つ、イマジンハートは気を失っていないようだが傷はあった。それでもこんな状況なのだから絶対絶命と言えてしまう。

「所詮、下等な猿に我らの考えは理解できないのだよ・・・」

「・・・よ。」

「？」

イマジンハートが何をいつているのか聞きとれないジモンそして今度は大きな声でジモンに言い放つ

「うるさいのよさつきから・・・人を下等な猿、下等な猿呼ばわりして・・・」

するとジモンが興味深そうにイマジンハートの目を見る。

「ほう・・・まだ目が死んでないか・・・さすがはヒーローといったところか・・・」

イマジンハートもとい上条当麻は目が死んでいなかった、この絶対絶命な状況でも・・・

「あなたはたしかに強い・・・でもそれだけで人を見下す権利なんて・・・あなたにあると思ってるの」

「・・・所詮、人は力で上か下か決める生き物だ・・・上の物が他

人を見下すのは当然の事だろう。」

「・・・でもそれだけの理由であなたが人の命を無差別に奪う権利なんて無い・・・結局あなたがしているのは強くなるうとして人の道から踏み外した外道のする事・・・そんな相手に・・・私は負けない・・・」

するとジモンが近づきトリシューラをイマジンハートの首に突きつける

「負けないだと・・・ハハハハハハ、おもしろい事をいう、この状況で貴様に何ができるのだ・・・是非見せて貰いたい物だ・・・ハハハハハハハハハハ」

ザシュ！！

この瞬間、ジモンの笑い声が一瞬にして静まった、そしてジモンの腹には短刀が刺さっていた

「なっ・・・これは・・・一体・・・」

するとイマジンハートが表情を少し緩ませる

「・・・油断したわね」

ジモンの腹に突き刺さっていた短刀はイマジンハートの短刀である

ハイボルテージ

疾風雷刀であった。ジモンの腹から血が出る。そしてイマジンハ

ートに巻かれていた鎖が緩んだ、この隙にイマジンハートは鎖から抜

ハイボルテージ

け出し鎖を消滅させた。するとジモンは疾風雷刀を腹から抜き投げ

ハイボルテージ

捨てる、投げ捨てた疾風雷刀はイマジンハートがきちんとキャッチする。

「よくも・・・貴様だけは絶対に許さんぞ・・・殺してやアアアアア  
アウウウウウ！！！！！！」

ジモンは迅速の速さでイマジンハートに近づくイマジンハートはブレイブソードを居合いで構える

「これで終りだ下等な猿め！！」

ジモンはトリシューラを縦に思いっきり振る、がトリシューラが突

如ピキツという音を立てる

バキツ!!

トリシューラが壊れた、いや正式には壊された、目の前の幻想殺しに……

「な……ふざけるな……神の武器を破壊するなんて……そんな事があつてたまるか……」

トリシューラが壊され完全の冷静を失い狼狽するジモンだがイメージンハートはもうすでに先手を取っていた。

「手加減しないわよ」

「ひっ……!?!?」

ジモンが気づいた時にはもうイメージンハートはジモンの懷に飛び込んでいた、それも攻撃をする構えで……

「獅子九連斬!!」

バキツボコツドカッグシャバカドカバキドカバキツザクツ!!

ジモンにイメージンハートの打撃と斬撃の交じり合った怒濤の攻撃が繰り出される、ジモンには息をする暇すらも与えない、だが最後の最後にジモンが攻撃から抜け出す

「我は下等な猿とは違う……なのになんで勝てないのだ……」

だが今のジモンの言葉がイメージンハートの怒りを増幅させた。ようするに火を油に注いだ結果になる。

「……いい加減に気づきなさい、あなたの幻想はもう終わっているのよ……」

「……うるさい下等生物が我に命令も口答えもするな!!!」

「……」

そうとうにイメージンハートはブレイブソードを居合いの構えを取る。そしてブレイブソードに赤い気が溜まる、溜まった赤い気は大きな

刃となる。そしてそれをイマジンハートは縦に放ったその大きな赤い刃を

フレイブクラッシュャー  
「豪神斬ー!!」

放たれた一撃はジモンの横を掠った、外れたのではなく、わざとはずしたのだ。放たれたこの一撃の被害はかなり大きくイマジンハートから一直線の地面は何も残っていなかった。ただ狙ったのは家も建物も無いいわゆるゲートの近くなので学園都士内側の被害は少ない  
「ひッ・・・た・・・助けてええええっえ!!!!!!」

ジモンは情けない声を大声で上げて逃げ出してしまった。そしてイマジンハートはほっと溜め息を吐いた

5

「・・・これは俺の予想を超えているぞアレイスター」

土御門は目の前にいる男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

そして生命維持のポットの中で外界の様子を拝見している学園都士統括理事会長アレイスタークロウリーに言葉を言い放つ

「土御門元春、私もここまでだとは思ってなかったよ・・・しかも今ので滞空回線アンダーラインが一部大きな損失を受けてしまった。」

すると土御門はアレイスターの強い口調で言い放つ

「・・・どうやら貴様は知っていたらしいな・・・アレイスタークロウリー」

「一体なにの事を言っているのかな土御門元春」

「フン・・・知ったかするつもりか・・・アレイスタ、上条当麻が天使より格段に上位の存在女神の力を使えるのをなぜ黙っていた。」

「・・・まさか唯の人間が神の力を使うとは・・・これこそ神ならぬ身にて天上の意思にたどり着くもの・・・かもしれんな・・・」

すると土御門はアレイスターに背を向けこう言い放った

「・・・本来、神の力は人間は身に宿す事はできない。無理に身に宿した所で余りにも巨大な力で身は崩崖してしまう。だが上条当麻は人間の身にして女神の力を自由に使いこなしている。わからない事だらけだ」

そう言う土御門は黙って立ち去ってしまった。土御門がいなくなったのを確認するとアレイスターは静かに呟いた

「人間の身にして神の力を宿す物（human to conceive God）か・・・幻想殺しは一体どんな方法を使っているのか・・・調べる必要があるかもしれない・・・」



### 3章：人間の身にして神の力を宿す物（後書き）

・言い忘れましたが、どなたでも感想をお寄せください、待っています！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024x/>

---

とある女神の上条当麻外伝－学園都市での一週間－

2011年11月20日09時38分発行